

論文要約

風景構成法における彩色過程の
心理療法的意義に関する研究

清重 英矩

2023年

【論文要約】

風景構成法 (Landscape Montage Technique) は、精神科医の中井久夫によって 1969 年に考案され 1970 年に発表された、心理臨床場面でよく用いられる描画法の一つである。本法は、見守り手によって描き手の目の前で画用紙の四辺に沿ってペンで枠づけが行われ (枠づけ過程)、描き手はその枠づけされた画用紙に逐次提示される 10 の風景要素 (アイテム) をその都度ペンで描き入れ、最終的に一つの風景になるようにし (素描過程)、その後、その風景にクレパス等を用いて彩色を行い完成させる (彩色過程)、というものであり、完成した作品について話し合う (話し合い過程) こともある。

風景構成法の心理臨床学的価値については、従来、①風景を構成して描く課題を通して、日常の言語的な世界やその社会の価値観から一部解放された次元において、非言語的に描画表現が行われる中で描き手自身の内的対話が心理療法的作用を生むこと、②描かれた風景やその構成を心的表現として理解することをめぐって、描き手と見守り手の間に心的次元での相互的な交流が生じることにあること等、主に素描過程における表現の理解や営みの意義が指摘されてきた。本研究は、これまであまり取り上げられてこなかった彩色過程の営みについて、これまでも重要視されてきた関係の観点を含めて、心理臨床学的に検討し、その心理療法的意義について理論的・実証的に検討するものである。

序章では、現代の心理療法をめぐる課題に関する先行研究を基に、現代社会では効率化や実用性が重視されるようになったが、心理療法が効率的で実用であろうとすることは本末転倒であるという知見と、風景構成法が社会の価値観や理解では捉えにくい心的営みへの接近法として開発された描画法である事実を踏まえ、彩色過程の心的体験に接近するための知見がそれに資するという問題意識を明示している。

第 1 章では、国内外の風景構成法に関する先行研究および知見の再検討を行い、第一に、風景構成法を用いた心理臨床実践においては、先行研究による既存の知見に代表される風景構成法の営みの“外”の視点から得られる理解の次元と、その場での体験に代表される風景構成法の営みの“内”の視点から得られる理解の次元とを、見守り手自身が描き手との関係において個別に吟味し理解することが必要であることを指摘した。第二に、従来の研究の多くが、非言語的

に表現されるものから描き手の心的世界を理解するために積み重ねられてきたことを指摘し、それが心理臨床学的価値を支える重要な点であることを再確認した。第三に、風景構成法における彩色過程の心理臨床学的位置づけおよび研究に伴う困難について指摘した。彩色過程を取り上げた数少ない先行研究の再検討を通して、彩色過程に特有の「情動づけ」や「構成」の機能などの知見を踏まえ、彩色過程が単に素描風景の補完的な役割だけではなく、風景構成法の心理療法的意義に深く関連する独自のプロセスである可能性を示した。一方で、彩色過程の営みにおける“内”の体験そのものに注目した研究は未だ少ないことを指摘し、彩色過程における描き手の体験に注目し、その心理療法的意義について検討することの必要性を示した。

第2章では、描画法および風景構成法の心理療法的意義について理論的に検討した。まず、描画法における心理療法と心理査定の両側面の関係については、見守り手が実施目的や状況要因等を踏まえて、心理臨床の営みの中に描画法の基本的要素（《かく》・《みる》・《かかわる》）をいかに位置づけるかによって、強調される側面が異なり、各要素を継時的な流れとして位置づけると心理査定としての側面が、時空間の限定されたその時その場での同時的な営みとして位置づけると心理療法としての側面がそれぞれ強調されることを示した。描画法の心理療法的意義については、主に Jung, C.G による分析心理学の心理療法理論に基づいて捉え直し、描画法の営みによって、描き手の意識的主体である自我と無意識的な心的内容との間に内的対話が生じることや、描き手と見守り手の関係のもとで行われることで「第三のもの」としてのイメージの働きが生じること等が、意識的主体としての自我だけではなく無意識的領域も含めた心の全体性の主体としての自己に新たな展開や変容を促すという点で重要であることを整理した。こうした既存の理解に加え、描画法における心理療法的営みにおけるイメージの機能等と、描画法の基本的要素を《かく（描く・創造する等）》・《みる（目で見ると理解する・想像する・発見する等）》・《かかわる（描画の場への主体の関与・伝える・応える等）》として捉えた上で、それらの関連について検討し、風景構成法における《かく》・《みる》・《かかわる》それぞれと、それらが同時的に多層的に関連し合うことによって生じるものが、心理療法的意義を支えていることについて論じた。

第3章では、色のもつ一般的性質や心理的効果、象徴的意味など、色彩に関する先行研究を再検討し、心理臨床における色とイメージの関係について論じた。まず、色に関する心理学的研究、物理学的研究や現象学的研究を踏まえ、色の持つ特性や感覚属性が心理的側面に与える効果や影響について整理し、色の知覚に関して物理学的・生理学的な普遍的法則があると同時に、色の瞬間性・不安定性・直截性・情緒性などの特徴が心的次元での個別的な反応に関連することを指摘した。次に、心理臨床における色を用いた技法について、色を語る技法としてロールシャッハ法、色を選ぶ技法としてカラー・ピラミッド・テストや色彩象徴テスト、色を塗る技法として色塗り法や色彩分割法、なぐり描き法などを取り上げ、各技法における色の扱いの特徴について検討した。具体的には、色のもつ象徴的意味や、色の性質による情緒的動揺、およびその統制のあり方との関係から、パーソナリティの情動的側面や自我機能、知的能力等の理解を試みようとする事、また、使用色からは病理性のみではなく治療可能性を見出しうる事等を指摘した。さらに、色彩と象徴言語の関連から、ある対象によるイメージ体験と色によるイメージ体験との共通性から色で《かく》ことが生じる可能性を示した。色を中心としたイメージ体験が、思いもよらない表現をもたらす可能性を有するという意味でも、色で《かく》ことは心理療法として重要な役割を担う可能性があり、風景構成法の彩色過程においても同様の可能性があることを示した。

以上の研究史的・理論的検討を踏まえ、第4章以降では、大学生を対象に風景構成法を実施するとともに、質問紙法と半構造化面接法による調査から得られたデータ分析を通じ、彩色過程の心的体験について多角的に検討した。

第4章・第5章では、それぞれ「彩色する」こと・「彩色しない」ことに関して描き手と作品の間で展開される体験に注目し、半構造化面接により得られた語りのKJ法を用いた質的分析により、それぞれについて、描き手の主観的体験の質的側面を反映するカテゴリを抽出し、精査した。

第4章では、「彩色する」ことをめぐる主観的体験の質的分析から、【Ⅰ：彩色過程における作品に対する印象】、【Ⅱ：彩色行為に対する描き手自身の感想や態度】、【Ⅲ：彩色における色の選択基準】、【Ⅳ：彩色の工夫および関わりの体験】、【Ⅴ：描画状況に関する体験】の5カテゴリがあることを示した。具体

的には、【Ⅰ：彩色過程における作品に対する印象】からは、《みる》体験として、風景を内的イメージとの関係で体験することと、表現を対象化して客観的に評価や観察を行うことが示された。【Ⅱ：彩色行為に対する描き手自身の感想や態度】からは、彩色過程で肯定的な感情体験が生じやすいことや、彩色に伴う戸惑いや迷いが生じること等が示された。【Ⅲ：彩色における色の選択基準】からは、色選択に関して、対象となるアイテムや風景によるイメージに重きを置く場合と色自体の性質によるイメージに重きを置く場合の2つの基準があり、色自体の性質によるイメージも心理療法的意義という点で重要である可能性が示された。【Ⅳ：彩色の工夫および関わりの体験】からは、描き手が自身に固有の《かく》仕方によって、作品との自己対話とも呼べる循環的体験に没入し新たなイメージの展開が生じる一方で、未彩色部分への関わり方には描き手自身の主体のあり方が問われる側面があることが示された。【Ⅴ：描画状況に関する体験】からは、風景構成法の場合を形成する状況的要素に対する描き手の感じ方が、彩色への取り組みに一部関係することが示された。これらの検討により、「彩色する」ことが、描き手と作品の間での循環的体験を通して情緒を伴う心的内容を賦活し内的対話を促進すること、特に、色自体の性質によるイメージが展開されることや、未彩色部分との関わりにおいて描き手の主体のあり方が問われること等が、心理療法的意義を支える重要な契機となることを示した。

第5章では、「余白」「塗り残し」等の「彩色しない」ことをめぐる主観的体験の質的分析から、①余白を彩色しない「空白」は、何らかの境界や対象の潜在性を示唆する表現である場合や、「白」の意味を付与された表現である場合があること、②「アイテムの塗り残し」は、描き手が能動的・主体的にそこに「白」の意味を与える場合があることを示した。従来、風景構成法における未彩色部分は、描き手の心的葛藤を受動的に表す妥協形成の表現と捉えられてきたが、本結果からは、「彩色しない」ことが、描き手の主体の回復や生成に伴うもがきや苦しき、曖昧さや矛盾などを緩やかに抱えるという創造的な意味合いをも担う可能性が示唆された。

第6章・第7章では、風景構成法の心理臨床学的価値の1つである描き手と見守り手の関係を基盤とする相互的な交流、すなわち「関係」に基づく観点から、描き手－作品－見守り手の三者関係において彩色することの意義に焦点を

当てて検討した。第 6 章では、風景構成法における関係とやりとりに関して、彩色過程においてことばの使用を前提としない特徴があることを指摘し、他の過程でのことばによる意識的な水準でのやりとりと比較すると、彩色過程では描き手と作品の間でより内的な循環的体験への没入が促進されることを示した。見守り手と作品の間でも同様に内的な循環的体験が展開され、相対的に無意識を含めた心の全体性に関わる心的内容が賦活されると考えられることを示した。そして、描き手と見守り手双方の内的な循環的体験は互いの内的体験を感じ取りながら展開し、描き手には作品との間での循環的体験と内的な見守り手イメージとの交流が生じ、それらが相互的に作用すると同時に、見守り手にも同様の作用が生じると考えられることを示した。以上から、彩色過程における体験が、その前後の過程における関係があって成立しており、「関係」の観点による彩色過程の特徴はその心理療法的意義を支える基盤として重要であることを示した。

第 7 章では、大学生を対象に、風景構成法を実施し、描き手の素描過程および彩色過程における対作品体験と、対見守り手体験との関係について、描き手の主観的体験に関する質問紙法 (SD 法) と半構造化面接法での語りを対象とした調査と分析を行った。その結果、対見守り手体験については、素描過程で緊張感や不安を抱えつつも彩色過程でそれらが意識されなかった「後退群」、素描過程および彩色過程において緊張感や不安などの他者への意識が継続した「持続群」、素描過程での緊張感が彩色過程で和らぎつつも再び意識されるなど定まらない「ゆらぎ群」、素描過程および彩色過程ともにほぼ一貫して見守り手に対する体験が語られない「無変化群」の 4 群に分類された。対作品体験については、SD 法による印象評定値を基にした因子分析により、「情動性」、「調和性」、「分化性」の 3 因子が抽出された。この 3 因子について、先の 4 群との素描過程・彩色過程の 2 つの時点との関係について分散分析を行った結果、素描過程よりも彩色過程において、描き手は対作品体験の情動性、調和性、分化性が高まることが各群に共通して認められた。また、持続群と無変化群は、彩色過程で情動性がより高まる点で共通するが、持続群は分化性が、無変化群は調和性が、素描過程から一貫して高い点で違いがあり、ゆらぎ群は調和性や分化性が一貫して低いことが示された。

これらに加え、各群の心的体験のより詳細な特徴に関して、代表的事例をとりあげて探索的検討を行った。①彩色過程で対見守り手体験が徐々に弱くなる「後退群」は、ほどよい安心感と同時に作品への没入感とイメージの新たな展開を体験することが示唆され、風景構成法における描き手の体験として従来想定されてきたものに最も近いものだと考えられる。②見守り手に対する意識が一貫して体験の前景に立つ「持続群」は、彩色過程で風景を対象化し評価する体験が強い一方で、色による情動性を意識的水準で強く体験することが示唆された。③彩色過程において不意の描画表現から見守り手に対する体験を感じる「ゆらぎ群」は、不安定な面がありつつも、対見守り手体験を支えに身体性や自律性を伴うイメージの深い次元で、風景との自己対話が生じる可能性が示唆された。④対見守り手体験が一貫して語られない「無変化群」は、作品に対して自ら調和的に収束させることが可能な範囲内で風景を描くことに集中することが示唆された。以上から、各群は描き手が風景を描き色を塗る対作品体験と対見守り手体験の関係に質的に異なる可能性と、見守り手との関係のもとで風景を描き彩色する体験のもつ心理療法的意義が各群で異なる可能性が示唆される。

終章では、本論文全体の議論を踏まえ、本論文の主題である彩色過程における心理療法的意義について、彩色過程において描き手と作品の間での循環的体験による内的プロセスの活性化やイメージの展開が重要であることが示された。色の性質から情緒を伴うイメージが賦活されることに加え、色自体の性質によるイメージから予期せぬ表現に出会うことや、未彩色部分に描き手の主体の潜在性が感受され、それが緩やかに抱えられること等が、描き手に心的次元での変容を生じさせる可能性を有し、それらが心理療法的意義を支えるものとなることが示唆された。さらに、そうした心理療法的意義は描き手が見守り手との関係をどのように体験するかによって強調される側面が異なることが示唆された。今後の課題と展望については、臨床場面での検証に向けた臨床事例での検討、心的体験を扱うための方法論上のさらなる工夫、見守り手の体験に関する検討、彩色による表現に関する基礎的な資料の集積等の必要性を指摘した。